
アイドルのありがちなストーリー？

春月桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイドルのありがちなストーリー？

【著者名】

春月桜

NZ8593H

【あらすじ】

デジタル系バンド「エルリックフライ」のファンの安須理沙。^{あす}^{りさ}理沙にはいろんな秘密があつた。そして、「エルリックフライ」の

…

恋愛（戀愛）

ハイクションですーーー！

色恋

私は安須 理沙。

「ヘルリックフライ」というビジュアル系バンドのファンである。その人達はまだ売れていないがファンは結構いるほうなので、多分もうすぐで芸能界という扉を叩くだろう。

私はお金がないので、バイトをして何とか小窓ライブハウスのチケットを買う。

でも、もうすぐで、生で見れる機会はなくなるだろう。

もう少し。

もう少しだけでいいから。

私から「ヘルリックフライ」を取らないで。

・ · · · ·

今日は「ヘルリックフライ」のライブ。

いつものように向とかやりくりして、貯めたお金をチケット売り場に持つていった。

ああ、また見れる。

あの声が聞ける。

あの音が聴ける。

私はいつもどいつもチケットを買い、ライブハウスに入った。

ギターー1つに、ベースギター、ドラム、マイク。

すべてが揃つてる。

この世に生きててよかったです。

そんなふうにまで思えるこのバンド。

私がファンになつたきっかけは友達に紹介してもらつたこと。

何もかもが心に響いた。

ほとんど無表情の人達だけど、何故か楽しそうなんだ。

一日でファンになつた。

このバンドにはみんな一人一人にファンがいる。

ギターー1は藍。^{あい}

ギターー2は舞。^{まい}

ベースは魄。^{かい}

ドラムは累^{るい}。

ボーカルは由^{ゆい}。

名前はみんな最後の文字が「い」で終わる。

*みんな男です。

でも、私はこのバンド事態が好きだから、誰がどうだとかは無い。

そう思っていた時だった。

視界が光に満ちた。

その瞬間、一気に「キヤ————！」とい歎声が起る。

私は後ろで眺める。

こつもれつ。

好きだけど。

前に行こうとは一回も思わない。

どうせ、近くにいてもどうにもならなーし。

そんなときだった。

頬に無数の雲が流れた。

私はこの頃、同居している彼氏といつもくついていない。

胸に響くこの切ない音楽は涙を押し出す。

いつも我慢している涙。

私は今の彼氏が浮気していることを知っている。

けど、好きといつも気持ちが少しあるのか、中々この縁を切れないでいる。

こんな自分に腹が立つてしおりがない。

悔し涙と、切ない涙が入り混じって、すじくじょっぱい。

バーンッ

そして、ライブが終わった。

私は一番最後まで残る。

いつもそうだ。

少し残っているぬくもりを感じるため。

後少しで、いなくなるかもしれないから、今のうちに。

私は頬に涙を流しながら舞台に手を当てた。

機械のせいで温かい床はとても、切ない。

そのときだつた。

「何してんの？」

つぶつていた田を開けてその声が聞こえたほつを見た。

びっくりした。

驚きが隠せなかつた。

近くにあの「HULRICKFLAY」のバンドの魄さんが私のことを見つめていた。

「え、あの、その…」

私は驚きでアタフタしていた。

鼓動がどんどん早くなる。

「何でお前毎回泣いてるの？」

その言葉に時間が止まつたかのようと思つた。

毎回？

「私が毎回きてることを知つてるんですか？」

私はまた驚いた。

あんな華やかなところからあんな暗いところが見えるはずが無い
と思っていたから。

「知ってる。それで毎回後ろで泣いてる。」

そんなのわかるんだ。

私は魄さんから田を逸らしながら言った。

「……色々と。」

私の頬にまた涙が流れた。

何で、あんな人のために泣かなきゃいけないのだろう。

浮氣なんかしてる人が悪いはずなのに。

なんだろう。

この切なさ。

悲しい。

「ふーん。」

魄さんは私にそつ一言語りでベースギターを持った。

私はうつむいた。

そのときだった。

頬に冷たい手があたつた。

涙を拭ってくれる冷たい手は、心に温かくなつて染み込んだ。

「「ヒルリックフライ」はもう少しでスカウトされちゃいますよね。」

私は冷たい手に私は自分の手を重ねた。

冷たい手はゴツゴツして、弦で出来た傷がわかつた。

「もうスカウトされてる。後何回かでここもこなくなると思つ。」

私は魄さんのことを見つめた。

後何回だらう。

三回？

一回？

それとも、一回？

この人達は私といる場所が違つ。

「そうですか…」

私は落ち込みながらつぶやいた。

そんなことはわかつていたはずなのに。

「さうなると、やはり何か心に引っかかる。」

「お前はもう見にこないのか？ライブ。」

妙に寂しそうに言つから、胸が軽く締め付けられた感じがした。

「行かなかつたら寂しいですか？」

私はニヤニヤ笑いながら言つた。

精一杯の強気。

「お前殴るぞ。」

隗さんはムスッとした顔で私に言つてきた。

「あはは、『めんなさい。嘘ですよ。見にはいけません。ここが私のギリギリなんです。東京とか、ドームとかになるライブは行けないんです。』」

私は苦笑いしながら言つた。

もう少し。

後少し。

「もうか……じゃあ……」

魄さんが何かを言いかけた途端。

「魄ー！……遅いよー！……ってあれ？俺出る幕違った？」

大声を張つて出てきたのはボーカルでさよとやんちやな由さんだった。

そして、後ろにはゆっくりと歩いてくるバンドのメンバーに私は驚きが隠せなかつた。

「あれ？あ、毎回来てくれてる子じゃん。びっくり。」

笑つた顔が可愛くて、本当の女の子に見えた。

私と全然違う。

「由も知つてたのか？」

魄さんは少し不機嫌になりながらも由を人に尋ねた。

「あつたり前じやん。可愛いなーって思つてたからさ。話してみたかつたんだ。」

由さんは笑つて魄さんの隣に座つた。

「ふーん。」

魄さんは細田で言つた。

す「」い興味無さげ…

私は顔に汗をたらした。

「あ、隗と由、発見……逮捕。さやははは。」

「の可愛い人は藍さんだ。

やっぱりしゃべるといつひつ人なんだ…

私は頷いた。

まあ、小さいし、ライブのときも毎回飛び跳ねたりしてるからわかるつちやわかるんだけど…。

てゆーか、ぬいぐるみ持つてる…。

つて、あ、あれ、私の大好きな眼帯ドクロベア。

私は目を輝かせた。

しかもレアなもので当たる「」ことが困難とされてる、めっちゃ貴重なぬいぐるみ。

その熱い視線に気づいた藍さんは…

「のぬいぐるみ欲しいの？」

藍さんは可愛い顔で私に首を傾げてきた。

私は田を輝かせながら頷いた。

「じゃあ、あげる。」

私にいきなり渡してくれた。

え？

「これって、すごコレアのですよ？」

私は受け取りながら尋ねた。

「いいの、いいの、確かに俺そのドクロベア好きだけど、家に何個もあるし。だから、いらない。」

レアなものがいっぱいあるんですけど、これひとつ？

私は疑問に思つたが、聞くのは止めといた。

私はもうつたばかりのぬいぐるみを思いつきり強く抱きしめた。

「ありがとうございます！...藍さん。」

私はもうつたドクロベアに頬ずりをした。

新品同様ののりの香りがした。

「取り込む中悪いんだけど、君時間大丈夫？」

すごい無口で有名な累さんが私に尋ねてきた。

私は我に帰り、円くて、真ん中に星が輝いている腕時計を見つめた。

時計の針は夜の十時を指している。

私は時刻を見て一気に温かくなつていた気持ちが引いてしまった。その表情を見てなのか。

「どうした？」

魄さんが私に尋ねてきた。

私は無理矢理笑つた。

「なんでもありません。じゃあ、そろそろ帰ります。」

私は重い気持ちを抱えながら歩き出した。

・・・・・

「あの子可愛いね。」

由がすうじい鮮やかな顔で笑う。

俺にはあまりマネはできないものだ。

「あのぬいぐるみを抱きしめて笑つた時はきっと俺の次に可愛いね。」

「

藍がそう確信していた。

藍は滅多に人のことを褒めない。

「それでも、藍のほうが可愛ええんか。」

やつあまでは全くしゃべらなかつた舞がそつ興味無氣に呟つた。

舞は関西出身だから、いつも関西弁だ。

「そりいえばいつもはしゃべんない。累が今日は自分からじやべつたね。」

由が不思議そつな表情をしながら言った。

累は由の田から田を逸らした。

「累……今逃げたな……」

相変わらず、元気な由は累に噛み付いた。

「つづつ一殺す。」

累が鋭い田つきでちづぶやいた。

由はゆづくり、噛んでいた腕から離れた。

本当に犬だな。

俺はそんなバンドのメンバー達に呆れていた。

でも、確かに。

あの子は可愛いと感じた。

「隗も、あんまりファンの子としゃべらないのに…！何で隗が最初にしゃべってたんだよ。」

由が俺に話しかけてきた。

俺はめんどくさかつたので…

別
に

俺はベースギターを持ちながら移動した。

—みんなしてひどくねー！？

由が一人で叫んでいた。

•
•
•
•
•

私がさつき嫌がつた理由は……

「ねえ、彼女戻つてくんじやないの？」

「いつものよつてにリビングでそんなふうな会話が聞こじやる。」

もつ帰つてきてるわよ。

私は怒りを心に押し込んだ。

「大丈夫。返ってきてたって、何にも言やしないよ。」

彼氏はきっと笑いながら言っているのだろう。

口調が軽かつた。

いつもひびく。

何でこんな人と同居なんてしたんだろう。

つづづく私は後悔した。

でも、実家にも帰りたくは無い。

私の唯一何にも考えないでいられるのは、「エルリックフライ」のライブの時だけなのだ。

だから、私には「エルリックフライ」は無くてはならないものなのだ。

でも、私がどうしようとも何もできないから。

私は一人、暗い部屋で月明かりだけを感じて眠りに着く。

この生活が変わることはあるのだろうか。

・ · · · ·

変わる。

どんどん変わる。

どうして、この人達と……

・ ・ ・ ・

次に続く。

アイドルのありがちなストーリー2

朝いつもと同じ時間に起きて。

いつもと同じように一人で朝食を食べて。

いつものように勤めてるバイト先で仕事をして。

いつものようにあの寂しい家に一人で帰る。

今度はいつもライブをするのだろう。

ああ、早く曲を聴きたい。

あの綺麗なバンドに浸りたい。

そう考えていた時だった。

ポンッ

いきなり肩を叩かれた。

私は叩かれたほうを向いた。

そこには思つても見なかつた光景だった。

「隗さん？」

私はびっくりした。

マイクが薄く、髪が真っ直ぐなので驚いた。

「よくわかったな。」

魄さんも驚いた顔をしていた。

自分が呴いたんでしょ？

私はちよつと不思議に思った。

「まあ、ファンですかね。」

私は笑う。

「少し話したかったからここのに来た。何時に終わる？」

ほとんどが上田線の魄さん。

でも、そんな魄さんはカッコいいと思ひ。

「えーっと七時くらいに終わると聞こます。でも、後一時間くらいありますよ~。」

私は腕時計を見ながら言った。

「こんなに待たせるのも悪いし。

「待ってる。」

隗さんはそつと置いて、本が並ぶところに移動した。

すごい、悪い気がするんだけど。

何故か、いて欲しいと思つた。

何か、隗さんは私と通じるものを持つてゐるよつた気がする。

私は頑張つて働いた。

・・・・・

「すみません。待たせちゃつて。」

私は仕事が終わり私服に着替え、すぐに隗さんに駆け寄つた。

「俺が待つてゐつて言つた。だから、謝るな。」

隗さんはそう言つて少し微笑んだ。

その隗さんの微笑みはとても鮮やかで。

綺麗だった。

やつぱり、何か境界線を感じる。

・・・・・

「ねえ、あの人、ロン毛だけど、めっちゃかっこよくない??」

私と同じくらいの人が隗さんのことを見ながら、話していた。

相変わらず、今時の子ってキャピキャピしてて、可愛いこと思つた。

私とは、全然違う。

いつもやう思わせる。

「ロンもつてそんな嫌なもんのか？」

いきなり隗さんが不思議そうに私に尋ねてきた。

私はいつもクールな隗さんがそんな顔をして、そんなことを尋ねてくるのがすげ面白くて。

「あははは……」

私はお腹を押さえながら笑つた。

ギャップがあつすぎで、すごい可愛くと思つた。

「そ、そんな笑う」とか?」

今気づいたことだか、きっと隗さんは天然なんだろう。

「い、いえ。ちょっと、面白くて。あはは。まあ、そうですねー…あまり、好む人はいないのかもせんね。」

私は少し苦笑いをしながら応えた。

「そうか。お前もか？」

いきなり私にと声われたので、驚いた。

でも、少ししてうつむき…

「私はどちらでもいいです。私は本当に必要で、大切な人だったら、どんな格好でも、あまり気にしません。」

笑いながらそう言った。

「そうか。」

隗さんは安心したかのような声でそりづぶやいた。

私はそんな隗さんを見て首をかしげた。

街灯が二つ並ぶ人影を作った。

・ · · ·

私と隗さんはいろんな話をした。

ほとんどは「ハルリックフライ」のことだけだ。

それはそれでとても話しやすかつた。

スカウトの「こと。

もつ少しでライブハウスでのライブはできなくなる」と。

夢のこと。

楽しい時間はすぐ過ぎてしまつもの。

「お前、時間大丈夫か？」

隗さんは私にそう尋ねてきた。

私は腕時計を見つめた。

針が示した時間は十時。

私は暗い顔になった。

「私は大丈夫なんですか？」隗さんが時間がダメですよね？」

私はあのときと同じ顔をして苦笑いをした。

その苦笑いに気づいたのかわからないけど。

「そうだな。でも、お前を送つてく。」

隗さんはそつと置いて、ベンチから立ち上がった。

私は暗い顔をして、ベンチから立ち上がる。

帰りたくない。

その言葉が何回も頭をかきつぶ。

・・・・・

すぐ元に戻りました。

いつもここでいる明りが今日は消えていました。

私はそのときこすりにわかつた。

私は手が少し震えた。

「こんなでかいと」「一人で住んでんのか？」

魄さんは私に驚きながら尋ねてきた。

「いえ。一応彼氏と。」

震える右手を左手で押さえつけた。

小さい声は微かに震えていた。

「彼氏…」

魄さんはうつぶやいた。

私にはあまり聞こえなかつた。

「それじゃ、さよなら。」

私は苦笑いをして手をふつた。

本当は嫌だ。

私はカバンから鍵を探し出し鍵穴に差し込もうとした。

その瞬間だつた。

知らない女の人の喘ぎ声が聞こえた。

私は手から鍵を落とした。

そして、頬に涙が伝わった。

冷たい地面にへたり込んだ。

ギュッ

そのときだ。

私は首に背中に人の温かみを感じた。

「今日は俺の家に來い。」

私の好きな低くて耳に響く声。

私は隗さんの手を握つた。

・ · · · ·

ガチャツ

私と隗さんは何も話さずにただ手を握り締めるだけだった。

隗さんの家は一人暮らしにしては少し広かった。

ほとんどが黒と白で統一してある家の中は男の人の匂いなんかしかなかった。

綺麗好きなのか、片付いている。

「どうでもいいから座つて。」

隗さんはそつまつて鍵をガラス張りの机に置いた。

私は適当に荷物を置いて、体を丸めて座った。

隗さんは何も言わずにコーヒーと紅茶を入れた。

隗さんは私に紅茶を差し出して、自分でコーヒーを一口飲んだ。

「ありがとうございます。」

私は小さい声でそつまつた。

紅茶の温かい匂いが私の体の中に流れ込んできた。

私の好きなダージリンの紅茶。

そして、隗さんはコーヒーのブルーマウンテンを飲んでいる。

「Jの前もそんな顔をしていた。」

魄さんは口につけていたコーヒーカップをガラス張りの机に置いた。

やつぱり、魄さんにはお見通しなのかもしれない。

私と魄さんはどこかで繋がっているような気がする。

「私、彼氏が浮氣してるの知ってるんです。でも、別れられなくて。もづ、全然好きじゃないはずなのに。でも、別れたら家に帰らなくちゃいけないし。」

私は紅茶を一口飲んで話した。

ダージリンの香りが口の中に上品に広がる。

温かい。

そう感じた。

「帰ればいい。」

魄さんは「コーヒーを一口ずつ飲みながらつぶやいた。

「色々あつて帰りたくないんですね。」

私は苦笑いしながら言った。

「 そうか。」

魄さんはそれ以上聞かないでくれた。

それは、優しさだったのがすぐにわかった。

この距離がとても居心地がよくて。

甘えてしまって自分が情けなくなつた。

私は眠くなり舟をここでしまつっていた。

その様子を見たのか。

「 寝たかつたら寝ていいから。ベットで寝る。」

魄さんはそう言って飲み終わった私が飲んでいたコップと魄さんのコップを片付けた。

やっぱり綺麗好きなんだ。

私は眺めながら瞳を閉じた。

ベットの支柱に寄りかかりながら寝てしまった。

・ · · · ·

無防備だな。

俺はコップを洗いながら小さく寝息を立ててこる子のことを見た。

俺は濡れた手を拭きあの子の近くに歩いた。

名前も知らない。

性格あまり知らない。

でも、何故か。

何故かこの子に引き付けられる。

氣づいた時にはその子と唇を重ねていた。

自分がずるくてムカつく奴だと、今思つた。

俺はその子が起きないよつてベットに掬い上げた。

そして、その子の隣で眠りに着いた。

思った以上に温かくて。

どこか懐かしいような気がした。

髪の毛から花みたいな香りが漂ってきた。

・ · · · ·

光が目に優しく広がっていく。

その光の中には綺麗な横顔があつた。

女人よりも綺麗なんぢやないだろ？

私はその顔を優しく触れた。

滑らかで触り心地がとてもよくて。

綺麗。

私は細目で眺めた。

ん？

今何時？

私は腕時計を見つめた。

時計の針が指す時間は朝の九時だった。

私はベットから飛び起きた。

いきなり動いたので魄さんが驚いて起きた。

「何だ？」

魄さんが目をこすりながら私に尋ねてきた。

「私、バイトが。」

私は焦りながら髪の毛を結び直していた。

「お前、日曜日もバイト入れてるのか？」

隗さんが私にそう尋ねてきた。

私はゴムを取つたまま固まつた。

ん？

日曜日？

「今日つて日曜日ですか？」

私はゆっくり隗さんに尋ねた。

隗さんは鼻で笑い、カレンダーを指差した。

「なんだー。よかつた。」

私はゆっくり座つた。

ため息をつき、自分に呆れた。

「お前つて本当に面白いよな。」

隗さんが私に微笑んだ。

その微笑を見て私も微笑んだ。

何だか、隗さんといふとホッとする。

「なあ、お前の名前教える。」

魄さんは私に命令口調で言つてきた。

私は一瞬ポカーンッとした。

少しして、気づいた。

「そりいえば… 言つて無かつたですね。私は安須 理沙です。」

私は微笑みながら言った。

「そりか。」

魄さんは微笑みながら言った。

その微笑はすべてを鮮やかにする。

私が自然に笑えるのはきっとこの人と一緒にいるから。

私は髪の毛を束ねようとしたときだった。

「おい。」

私は魄さんにいきなり呼ばれた。

私は首を傾げた。

「今日は髪結ぶな。」

隗さんは私のロングの髪の毛を愛しそうに手に絡めてきた。

その顔が私の鼓動を早く、そして大きくさせた。

心臓の音が隗さんに伝わるような気がした。

「か、隗さんはロングが好きなんですね。」

私は頬を赤くしながらそう言った。

その瞬間だつた。

私と隗さんの唇が重なつた。

私は一瞬驚いたが、ゆっくり瞳を閉じた。

甘い雰囲気が二人を包んだ。

温かくて頬に涙が伝つた。

私は罪を犯した。

恋人がいるというのに、他の人の家に泊まり唇を重ねていて。

やつと、答えがわかつた。

私が友の人と別れられないのは勇気がなくて、悪人になるのが嫌なんだ。

「わ、悪い。」

隗さんがいきなり唇を私の唇から離し、そう謝った。

私は頬に流れている涙を拭つて。

「いえ。」

そう言つた。

謝られたことで、少し胸が苦しくなつた。

好かれたい。

そう思つてしまつている。

固まつた状態が続いていたときだつた。

ブー…ブー…ブー…

隗さんの携帯のバイブが鳴つた。

隗さんはその携帯の画面を見た途端。

「悪い。この部屋好きに使つていいから。ちょっと、出かけてくる。」

バンツ

隗さんは私にそう言い残してどこかに言つてしまつた。

私は嫌な予感がしていた。

何故か、隗さんがどこかに行つてしまつた気がした。

私は体を小さくして、うずくまつた。

静かすぎて寂しい。

私は携帯を見つめた。

メールが一件届いていた。

そして…

やつと楽になれる。

そう思つた。

「別れよ。」

その一言で肩に重く压し掛かっていたものが全部降りたような気がした。

よかつた。

これでよかつたんだ。

私はいつの間にか頬に涙が伝わつていた。

私は光をなくした瞳をゆっくりと閉じた。

寂しい。

そう思つた。

・・・・・

誰もいないとひるに…

いつまでも、寂しさなんて感じないとひるに…

幸せって何処にあるの？

・・・・・

次に続く…

大切なものの（前書き）

これは、魄の物語の最終話です。

ですが、次には「アイドルのありがちなストーリー？」、「舞」編
」という小説を出すので、見てくれば嬉しいです。

結構、無理矢理みたに感じることもあると思いますが、そこらへんは大目に見てください。

大切なものの

私はゆっくり瞳を開いた。

腕時計の針は午後の九時。

つまり夜。

まだ、魄さんは帰つてこない。

私は自分のカバンを持ち、魄さんがガラス張りの机に置いていった鍵を持ち、外に出た。

風が私の髪を撫でる。

久しぶりの感覚を感じたような気がした。

たつた一日ぐらいのことなのに。

私は鍵をかけ、メモで鍵を包んで扉に挟んだ。

「さよなら。」

私は一言も言つて歩きだした。

・ · · · ·

どこへ行こう。

私はそう思いながら電車に乗った。

電車に揺られて何時間がたつただろうか。

私の周りに少人数しかいなくなっていた。

いつでも、一人だつた。

幼い頃も、同居の時も、そして、魄さんの家でも。

私には幸せになる資格が無いのかもしれない。

電車の窓の外を見つめた。

海が見える。

そうだ。

もう一人にならないように。

私は電車が止まった次の駅に降りた。

駅から少し歩いたところに海があった。

海の水面に綺麗に浮かび上がる月。

おぼろげで綺麗。

波の音が耳一杯に広がる。

私は頬に涙を伝わらせながらそつと思つた。

私はゆうくりと海に近づいた。

「お母さんやうやうしありに行へよ。」

私はそつづぶやいた。

海には胸ぐらいで浸つていた。

もつ少しで…

もう苦しい思いをしなくてすむ。

もう悲しまなくてすむ。

泣かなくてすむ。

ホツとした。

どんどん暗闇に自分の体が吸い込まれる。

意識が薄れ始めたときだつた。

誰か来る。

田の前に広がったのは人影だつた。

水の中で微かに目に映つたのは、やはりあの人だつた。

「どうしていつもあなたは私の近くにいるの？」

私は薄つすら開いていた瞳を閉じた。

・・・・・

閉じていた瞳をゆっくり開く。

瞳に映つたのは満天の星空だった。

横には海を見つめている魄さんがいた。

「魄さん？」

私は小さい声で呼んだ。

「いつも……いつもどうして？」

私は切なくなつた。

「どうして、あんなことをした。」

魄さんの声で怒つてることが一瞬でわかつた。

低くて迫力があつて。

そして、優しくて。

「もう……いなくなりたかったんです。いつもいつも一人で。きっと
いなくなつても、誰も気づかないだらうと思つて。」

私は座り、頬に雪を伝わらせた。

その瞬間だった。

ギュッ

隗さんが私のことを強く抱きしめた。

ミントのコロコの香りが海の潮の香りが混じり、はじける

優しい風が体を包む。

そう感じたことが生きてくるとこいつとの証拠になった。

「寂しかつたら俺のところに来ればいい。苦しかつたら俺に抱きつきばいい。悲しかつたら俺の腕の中で泣けばいい。だから……だから、いなくならないでくれ。もうこれ以上大切な人を失いたくないんだ！……！」

首に一粒の雪が落ちた。

その時に気づいた。

隗さんが泣いていた。

私は隗さんの背中に腕を回した。

私よりも遙かに広い背中は冷たくて潮の香りがした。

命がけで私のことを救ってくれた。

助けてくれた。

ありがとう。

私はもつと強く抱きしめた。

もう、一人は嫌だ。

・ · · · ·

私と魄さんは手を繋ぎながらゆづくづ歩いていた。

何処へ行くのかはわからない。

そして、突然魄さんが話し始める。

「さつき、俺の御袋が亡くなつた。」

魄さんが発した言葉に私は目を大きく開いた。

私は魄さんの顔を見つめた。

魄さんは私のことを一皿見て、砂浜に腰を下ろした。

魄さんの頬に涙が伝っているのがわかつた。

遠くを見つめる顔がすごく切なくて私の胸を締め付ける。

私もやつとお姉さんが亡くなつたときせやつこう顔をしていたの
だらう。

今なら魄さんの気持ちもわかつてあげられる。

私はしゃがんで魄さんを抱きしめた。

今の気持ちは私が一番わかつてあげられる。

優しく、そして強く魄さんを抱きしめた。

魄さんは私の腰に腕を回した。

私の気持ちが魄さんに通じたらしい。

やはり、どこかで何かが魄さんと私は繋がつてゐるのだろう。

「泣きたいときには泣いて置いてください。そうすれば、きっと明日には綺麗な朝が来ます。大丈夫です。泣き顔だつて私が隠します。だから、思つ存分泣いてください。」

私は魄さんの頭に頬をつけてそづ囁いた。

ゆづくつでいい。

私が魄さんの力になれる」と全部やうひ。

私はそつ決意した。

「ありがとう。」

小さくて聞こえないくらい微かな声なのに、私の耳に響いたのがわかつた。

海の波が耳に響く。

周りにまた静けさが戻った。

・・・・・

ゆっくり瞳を開いた。

「コーヒーの香りが部屋中に立ち込めている。

隣にはまだ少し温かいぬくもりがあった。

私は手をつき、起き上がる。

寝室からリビングが見えた。

隗さんが「コーヒーカップを両手で持ち、遠い田舎の外を見ている。

私はあれから、隗さんの家にまたお世話になつた。

隗さんがあの海にいたのは母親さんがいた病院がその海に近かつたからだそうだ。

私も母が死んだ時がそつだつた。

そして、憎しみが生まれた。

もうあの人との間に戻りたくない。

私は自分の父を親と思わないだらう。

あのときの悲鳴がまだ耳に残っている。

私は耳をふさいだ。

嫌。

怖い。

その時だった。

「大丈夫か？」

魄さんが私の隣に来て顔を覗き込んできた。

私は魄さんに抱きついた。

憎しみと悲しみが胸の底から込み上げてくるのを必死に抑えた。

いつからだらう。

こんなに自分が弱くなつたのは。

いつもは平氣だったのに。

今は隗さんを頼りすぎてしまつ。

隗さんは優しく抱きしめてくれた。

そして、私の耳元で囁いてくれた。

「大丈夫。俺はずっとお前の隣にいる。そうだ、今後、俺の家で暮らせよな。」

隗さんの言葉に私は目を丸くした。

え？

私はゆっくり隗さんから腕を離した。

私は真っ直ぐに隗さんを見つめて聞き返した。

「隗さんの家で？一緒に？」

私は恐る恐る顔を引きつった。

まさか……

「ああ、そうだ。お前、彼氏と別れたんだろ？」

私はまた目が点になつた。

何故知つてるの？

「何で……」

私は啞然。

驚きが隠せるわけが無い。

誰にも話したことが無いはずなのに。

「そんなこと、誰にでもわかる。お前の行動パターンがわかりやすいからだ。」

隗さんは白痴げにそう言った。

私はガクツと傾いた。

あんまり答えるになつてない気がする。

私はそう呆れながらも笑つた。

嬉しかったのは事実だし。

上から田線で言われたけど、いつものことだし。

それに悪いことを言つてゐるのでは無いから。

これからはまたと楽しくなるね。

・ · · · ·

一緒に暮らして一週間が過ぎた。

隗さんの家にも慣れて、いつも無表情だったバイトでも笑えるようになった。

いつも笑えるようになったのは、隗さんのおかげだよ。

ありがとう。

いつもその言葉が心に溢れている。

私はそんな幸せな日々を送っていた。

そんなある日だった。

隗さんにライブハウスでの最後のライブのチケットをもらつて曲を聴き終わった時だった。

隗さんと私は話していた。

隗さんはライブで使つたものを片付けながら言葉を発してゐる。

そんなときだつた。

「やつといた。安須 理沙。」

聞いたことの無い、低く暗い声が私の耳に響いた。

私はその声がしたほうを振り向いた。

瞳に映つた映像は見たことの無い光景だつた。

誰かも知らない人は怖い顔で私を見つめている。

「あの、ど、どちら様ですか？」

私はおどおどしながら尋ねた。

体が震えた。

変な汗をかいている。

「そつか、お前は知らないんだよな。あんなに小さかつたからな。」

知らない人は光を失った瞳をしていた。

なんだろう。

この人おかしい。

「私の過去を知ってるの？」

私はまた尋ねた。

顔の筋肉が引きつる感覚がある。

憎しみで溢れている私の過去。

誰も知るはずが無い過去。

無くしたい過去。

忘れない過去。

恐怖感が私の心を蝕んでいく。

知らない人はそう言って私に向かって走ってきた。

え？

ポケットから光るもののが見えた。

私は思いつき歯を食い縛った。

え？

痛くない。

私はその瞬間心臓が止まつたのが自分でわかつた。

崩れ落ちるよつに倒れた。

どんどん広がる赤い液体。

……………」

私にはそれ以上何も聞こえなくなった。

パニック状態に陥つた私は氣を失つた。

外にはサイレンの音が鳴り響く。

・・・・・

隗さんは何とか一命を取り留めたらしい。

でも、私は隗さんに逢いに行けなくなつた。

隗さんが入院して三ヶ月。

「ハルリックフライ」のバンドのみんなには一緒に行動しようと何回も誘われたけど。

また隗さんが巻き込まれるんじゃないかと思い外に出ることを極端に拒否した。

電話や、メールはやり取りはできるのだけれど。

やはり怖かった。

私の父はやべれの組長をしてくる。

薬やらタバコやら危険なものまで手を染めている。

私は一度も笑わない父が大嫌いだった。

そして、事件が起こったのだ。

私と母と父で始めての外食に行つたときだつた。

父に放たれた拳銃が母の体を貫いた。

でも、その母を置いて父は自分だけ帰つた。

私は母を呼んだ。

今でもその悲しみが心に蘇る。

体が震え、血の気が引いていく感覚は恐怖感といつものと違えた。

染み付いて取れない叫び声。

人が逃げていく足の音。

次々と放たれた拳銃の弾。

人の生暖かい血液。

その怖い状態を小さい頃から繰り返してきた私はもうこれ以上ここにいたらおかしくなるどころじやないと思い、逃げてきたのに。

また、この状態に戻つてしまつた。

やつと翼を広げた鳥にまた翼に傷を負わせた。

私はそのまま歩いていた。

外の風を感じるのも無く。

無表情で歩いた。

憎しみの顔はきっと普通の人じゃないだろ？

・ · · · ·

ガチャツ

扉を開けるとタバコやなんやらのすいべ気持ち悪い危険な香りがした。

「あ、理沙さん。」

「おおー、めっちゃ綺麗になつたなー。」

私はいろんな言葉を無視し、父の前に立つた。

父は私を見るなり驚いた顔をした。

「理沙？お前、これまで何処行つてたんだ？？！？」

父はそう言って私にイスから立ち上がり近づいてきた。

私はポケットからナイフを取り出した。

「り、理沙？」

父は驚いた顔をまた見せた。

私は無表情のままで父に言葉を発した。

「あんたの」と、一度もお父さんなんて思つた」と無いから。」

私は田もあわせずにそつと言つた。

父は無言になつた。

「笑わない。泣かない。怒らない。本当に心があるのかな? そう思つてた。でも、わかつたよ。心なんてあんたには最初から無かつたんだ。」

私の頬には涙が伝つた。

「どうして、お母さんのお葬式に来なかつたの? そんなに仕事が大事? お母さんよつも? ?」

私は精一杯尋ねた。

涙が溢れながら必死で尋ねた。

教えて欲しかつた。

父はゆつくり言葉を口にした。

「怖かつたんだ。俺が殺した早苗《お母さん》を見るのが。何回も

仲間の死に様を見てきたが、早苗だけは怖かった。本当に心の底から愛していたから。仕事なんかよりも早苗と理沙が大事だった。本当は何よりも失いたくなかった。「ごめん。ごめんな。」

初めてお父さんが泣いてるのを見た。

何回も歯を食い縛つて涙を拭つ父。

私はそつとナイフを下ろす。

本当は殺す気なんて無かつた。

誰かを殺す勇気なんて私には最初からありはしない。

「お父さんに関わった人が私のところにきたよ。」

私はまだ目を合わせないままそう言った。

「え？ 関わった？」

お父さんは思い出せないみたいだ。

そりや、当たり前だと思つ。

お父さんの組は人数が多いほうだから、何万人もいる。

「それで、私の大切な人が怪我をした。」

私は頬に涙を流し続けた。

もう失いたくない。

大切な誰かをなくしたくない。

その思いが体の奥から湧いてきた。

「大切な人っていうのは…お前の彼氏か？」

お父さんは心配そうな顔をした。

お父さんはこんなに感情豊かだったことを始めて知った。

「わからない。」

私のこの言葉にお父さんは首を少し傾けた。

「でも、すごく大切な人。あの人がいなくなるなら私もいなくなる。
私にとつてはいなくちゃならない存在。」

私はそう言った。

瞳を閉じた目にははつきりとあの人の微笑みが映った。

「じゃあ、俺は安心して死ねるな。」

私はその言葉に驚き、お父さんのほうに目を移した。

お父さんの顔は見たことの無い鮮やかさで微笑んでいた。

私は驚きで目を大きく開いた。

「ちやんとお前を守ってくれる人がいるんだから。俺は安心だ。」

私はこんなに優しい人だと全く気がかずに自分だけが不幸面して生きていたのかと思いつととても情けなくなつた。

私はそのときすくに悟つた。

お父さんはもう頬くは無いこと。

「お父さん。今までありがとうございました。」

私はそう言って笑つてお父さんのところを出た。

もう何があつても大丈夫なような気がした。

・ · · · ·

カラカラカラ…

引き戸の軽く鳴る音にみんなが目を向いた。

みんなで一瞬驚き、そして、みんなで喜んだ。

「よ来到了。ずっと待つてたよ。」

隗さんがそう微笑む。

私は泣きながら笑つた。

久しぶりにあつた魄さんはイスを叩いた。

その光景が無邪氣で可愛いと笑う。

私は魄さんが叩いたイスに腰をかけた。

そして、魄さんは私の正面に座った。

「左手出しね。」

魄さんはそつと優しく手を差し出した。

私は魄さんが広げてくれた手に自分の左手を置いた。

薬指に感じる冷たくて硬い感触は少しうずくつたかった。

「俺と結婚を前提に付き合って欲しい。」

魄さんは真剣な眼差しで私にそつと語ってきた。

私はもちろん、笑つて。

「はーー。」

そう応えた。

悲しみはいつかは消える。

そう教えてくれたのは私の愛しい恋人。

・ ・ ・ ・ ・

Hピローグ

鳥のさえずりが部屋に響く。

今日から新しい日々が始まる。

「おーい、この日ひじつはここ重ねておけばいいか?」

これから恋人の母親さんのお墓に報告に行く。

私と夫は一生を誓つ。

そう云えに…

きっとこれから、楽しくなるね。

終わり

大切なものの（後書き）

「「隗」編」最後まで読んでいただきありがとうございました。
次の作品もお願いします。

違う作品もぜひ読んでみてください。

舞の恋（前書き）

この話は舞が主人公です。
話は繋がってはいるんですが、ほとんど、隗と理沙は出てきません
ので、そこらへんはご了承ください。

舞の恋

つい最近になつて隗と安須さんが結婚した。

この頃隗が笑つようになつてきたのは、きっと安須さんと愛し合つてゐるからだと思つ。

俺は「ひらやましかつた。

あんなふつに笑つて一緒に歩み寄つて行けることが。

俺にはまだいない。

大切な人。

そんなことを考へてゐる時だつた。

・
・
・
・

「あ、あれ？ 美兎？」

隗と一緒に前を歩いていた安須さんが足を止める。

安須さんが呼んだ先にはショートカットの子が佇んでいた。

「あー やつぱり美兎だ。」

ほわんとした言い方をした安須さんが美兎と言つた人と抱き合つた。

「みなさんご紹ひしますね。」こうひがは「エルリックフライ」の「」と
を教えてくれた明澤 あけざわ 美鬼ちゃんです。」

安須さんが「」と嬉しそうな顔をして紹介してくれた。

明澤さんは俺達にペコッとお辞儀をしてくれた。

「美鬼。」「エルリックフライ」教えてくれてありがとう。」

安須さんは「」と嬉しそうな顔をしながら喋っていた。

あまり見たことのない「」と嬉しそうな顔はやはり可愛いなどとは思つた。

明澤さんは微笑みながら頷いた。

そして、かすれている声で…

「どういたしまして。」

そう言った。

すこしく微かだから口で読み取ることしかできなかつた。

背が少し小さくて、ロック系の服にチヨーンやらネックレスやピアスなどがついている。

バックには缶バッチや安全ピンやいろんなのを付けている。

でも、全体がモノクロで統一されていて可愛らしさだ。

「それで、美兎は「んなと」何してんの?」

安須さんがそう尋ねた。

ホンワコした言い方をするよつになつてきたのは最近になつてから。

やつじつ喋り方が楽なんだそうだ。

「今日は「ブランショーラ」の観賞の帰り。」

明沢さんはまた微かな声でやつ言つた。

「ブランショーラ」というバンドは女性ボーカルと男性ボーカルの一人とギターとベースとドラムのメンバーで、少し特徴的なバンドである。

俺達は歌の種類が違つのでよくは知らない。

「やうなの?じゃあ、一緒に帰ろよ?」

安須さんは少し困った顔をした。

明沢さんは少し困った顔をした。

「でも、魄さんに悪い。」

明沢さんは魄に目を向いた。

「Jの子は魄と安須さんの関係を知つてゐるらしい。

魄は首をかしげた。

どうやら明沢さんの言葉が聞こえないらしい。

さつと聞くのは俺ぐらいたる。

俺はバンドのメンバー全員に呆れた。

「でも、美兎一人じゃ、危ないよ。」

安須さんが心配そうにさつした。

安須さんがそう言った途端明沢さんはつむいた。

俺はそんな光景を見て声をかけた。

「ほな、俺送つたるわ。」

俺は首を回しながらそう言った。

そんなんめんどくさそうな光景を見てか。

「いい。」

明沢さんはさつて顔を背けて歩き出しちゃった。

「あ？ 何やあいつ。せつかく人が親切に…」

「美兎を悪く言わないでください。」

俺が話を話し終わる前に安須さんが切なそうにそう言った。

「どうして、そんなにあいつをかまうん? ほつときやいいもんを。」

俺は少し不愉快な顔をした。

「美兎には人にはあまり話せないことがあるんです。そのことを知つてるのは私や少人数の人達だけです。だから、私、今日は送つていきます。魄、ごめん。今日は先に帰るね。」

安須さんはすゞしく焦りながら明沢さんのところに走つていった。

俺はバンドのメンバーみんなに冷たい眼差しで睨まれた。

「す、すんまへん。」

俺は小さくなつた。

安須さんはどうしてあの子にあんなにかまつてるんやろか。

・ · · · ·

次の日だった。

「舞さん。昨日はすみませんでした。」

いきなり安須さんに謝られて驚いた。

マイク中の俺は笑えないの。

「大丈夫、大丈夫。俺全然氣にしてへんし。」

軽い口調でそう言つた。

それでも、安須さんはしょぼーんとしていた。

俺は少し罪悪感がきりになつて心を包んだ。

モヤモヤや〜…

俺はそう苦笑いしていた。

「あまり氣にするな。そんな顔をしてると舞が可哀想だろ？」

魄が俺の気持ちに気づいたのか安須さんの肩を叩いた。

安須さんはやはりモヤモヤしてるみたいで、まだ少し落ち込んでいた。

魄はそういうところが大人なのかもしれない。

俺も魄みたいにしたら大切な人ができるだろ？

俺は少し考えた。

マイク部屋の隣から、累や、藍が音程や、音量の調査をしている音が聞こえた。

・ ・ ・ ・

ライブも終わり、車までの移動をしていたときだった。

「あ、まだだねー美兎ー。」

安須さんが鮮やかな微笑みで声をかけたのは明沢さんだった。

明沢さんは元気に笑つた。

「今日もどいかのバンドの観賞？」

安須さんは続けて尋ねた。

明沢さんは大きく頷き…

「「アラウンドレーベル」」

アラウンドレーベルはバラードが多く、歌声が空氣に乗るのがファンの中で絶賛されているバンド。

明沢さんはすく嬉しそうな顔をしてそう言った。

ドキッ

俺の胸は大きく脈を打つた。

やはり女の子の笑顔は可愛いからだろうか。

「」の感覚は初めてだ。

「今日も一人だね。危ないよ。」

安須さんが頬を膨らましながらせりふやいた。

明沢さんは笑つて…

「いつも一人で来てる。」

そう言つた。

安須さんが明沢さんにかける声のは必ず「危ない」という言葉が入つている。

一体何があるのだろ？

俺は気になつた。

「それは、昼間とか夕方とかだからでしょ？でも、今は夜だもの。危ないから、また私が送つてくる。」

安須さんがお母さんみたいな口調でしゃべった。

「安須さん。今日は俺に送りさせてくれーな。家までしつかり送つてくれー。」

俺は前に一步出た。

今、少し寂しそうにしてる魄は今日俺のことを助けてくれたし。

俺はこいつをやつたるでーといつ感じでテンションを上げた。

「え、でも…」

「いい。」「

安須さんが戸惑つてると同時に明沢さんがムスッとした顔を微かに空氣で話しながらソラウンドで断つてきた。

「安須さんも女性だから危ないのは一緒に、俺が行く。それに、隗にも悪いし。安心せい、手も足も出しゃせんわ。」

俺は真面目に呟いた。

その真面目な雰囲気で気持ちが伝わったのか…

「わ、わかった。」

空氣に音で聞き取る言葉も面白くなと思つた。

やつぱつ声が出そーへんなのな。

俺はそのとこを確信した。

まるで探偵気取りだ。

「それじゃ、お願ひします。じゃあねー美兎。」

安須さんとバンドのメンバーは手を振りながら見えなくなつてい

つた。

「あ、俺たちも行こかー。」

俺は手をジャケットのポケットの中に突っ込んだ。

俺と明沢さんは何もしゃべらなかつた。

てゆーか、明沢さんが言葉をはつしてくれなかつた。

少しばは反應せい！－！－！

と思つていたが、結局は自分が悪かつたことに気づきまた落ち込んだ。

そして、電車に入った時だつた。

事件発生…

「お、あのときのやつじゅねーか。」

見覚えのあるチンピラどもがいた。

俺はこの前、絡まっていた女子高生の女の子を救つた時に殴つた奴らにここで逢つてしまつた。

俺はこれまでに何度もここめかみに汗をかいだ。

そんなときに思つてたときだつた。

明沢さんの手が震えていたのがわかった。

きっと気がつかれないようこじっこいるのだろう。

両手を強く握り締めていた。

俺は少し疑問に思った。

何故なら、普通の状態じゃ無かつたからだ。

すぐ怖いのか、小刻みに、大きく震えていた。

顔色がどんどん青白くなる。

「お、女もいる。おー！結構可愛いじゃん。こんなやつほつといて
お、俺らと一緒に遊ぼう。ね？？」

一人のリーダー的な男が明沢さんの肩に手を置いた。

明沢さんは体を一回反応させた。

眉間に皺をよせながら目を逸らした。

「おい。その女に触るんじゃないよ。次の駅で降りろ。相手し
たるわ。」

俺の心にイライラした気持ちが出てきた。

何故だろうだろう。

「なん」と「イライラ」してゐ俺にも、イライラしたし。

「いつもはまつきつものを語り明沢さんがいつもみたいと言わない」とにもイライラした。

何なんだよ。

そして、次の駅…

そして、数十分でまた電車の中に戻った。

相変わらず成長しない奴らだった。

また沈黙が俺らを包む。

でも、俺がその沈黙を破つた。

「どうして、いつもみたいに断らへんの？」

小ちい声でそう尋ねた。

電車の揺られる音に負けそうだったが、無事に聞こえたみたいで。

「少し前までバンドをやつてた。そこそこ売れてたし、すごい楽し
かつた。何より歌えた。でも、ある日から声を失つた。」

明沢さんは微かな空氣の声で言葉を発していた。

今も少し震えているのが声でわかった。

「何で、声を失つたんや？」

俺は気になつた。

何故だかは俺にも知らない。

でも、心が叫ぶ。

「教えてくれ」と。

「ファンのストーカーに襲われて。それ以来ライブの舞台に立てない。今度は何が襲つてくるだらつって、変な恐怖感が襲つてくる。」

明沢さんは悲しそうな表情をした。

きつと、歌いたいのだろう。

歌が大好きなのだろう。

「だから、いろんなバンドの観賞してたんやな。」

俺がそいつぶやいた後、明沢さんが小さく頷いた。

きつとまたあの明るい場所に立ちたいのだろう。

でも、それができないのだ。

そんなの生きてる心地がしないのは、バンドをやつてるからこそわかることだ。

明沢さんから歌をとる」とは、俺のギターをとることと同じだ。

俺はそれ以上何も言えなかつた。

このままだつたらきっと一度も明沢さんの声が聞けないのだろうか。

何故か悔しかつた。

・ · · ·

きっとこのときに戸惑い始めた。

俺の人生は君の色に輝くだろう。

・ · · ·

次に続く…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8593h/>

アイドルのありがちなストーリー？

2010年12月2日15時32分発行